

生涯学習情報誌

Life Learning

1 2016
Jan.
NO.305



自分の中の小さくとも新しい興味の芽を大切に

生涯学習開発財団理事長 松田妙子

ライフ・ラーニング・メンバーズの皆様、あけましておめでとうございます。新しい年を迎え、日ごろより財団の活動にご賛同いただき感謝申し上げます。

私は昨年10月3日に88歳の米寿を迎えました。周りの皆様からたくさんのお祝いの言葉をいただいたことはうれしく思っておりますが、私にとって年齢は単なる数字でしかありません。自分が好きな数字を選んで年齢にすれば良いのにとさえ思っています。普段から申し上げているとおり、何かを始めるのに年齢は関係ありません。節目の誕生日を祝ってもらいながら、さらに強く思いました。

私は常々、自分の生涯を、白の時期、青の時期、そしてオレンジの時期と分けていると申してきました。人生の

ステージを、年齢に囚われることなく、目の前に広がる美しい色で表現していたいと考えたのです。会員の皆様もぜひ、節目ごとに、ご自分の大好きな色で人生のキャンパスを塗っていただければと思います。

本誌の次ページにて紹介しておりますが、財団では昨年、21世紀最大の発見になるかもしれないとニュース等で見られている、ニコラス・リーヴス氏の研究・調査に助成をしました。大発見の感動を皆様と共有できるかもと想像するだけでワクワクします。リーヴス氏はインタビューの中で、小さな取っ掛かりが世紀の大発見につながる可能性もあるのだから、自分の中のどんな小さな興味でも大切にしないではいけないと話しておられます。まさにそれは、当財団が伝えたい理念であり姿勢でもあります。

私は財団設立当初より「学び続けることの大切さ、学びを通して社会との関わりを持ち続けることの大切さ」を訴えて参りました。米寿と言われる今でも、新たなチャレンジをしたいと心から思っています。

“生涯学習”のテーマは限りなく広く、全てのものが対象になります。財団では本年も、学び続け社会に役立とうとする人を応援し、引き続きシンポジウムや講演会なども提供してまいります。皆様にはぜひそこから、小さくとも新しい興味の芽を見つけていただきたく存じます。

今年一年が皆様にとってご多幸でありますことをお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。



古代エジプトアマルナ時代の研究 ―王妃ネフェルティティの墓の仮説に基づく調査・研究― ツタンカーメンの墓の奥に王妃ネフェルティティが眠る？ 財団が助成した調査にいま世界中が注目!!

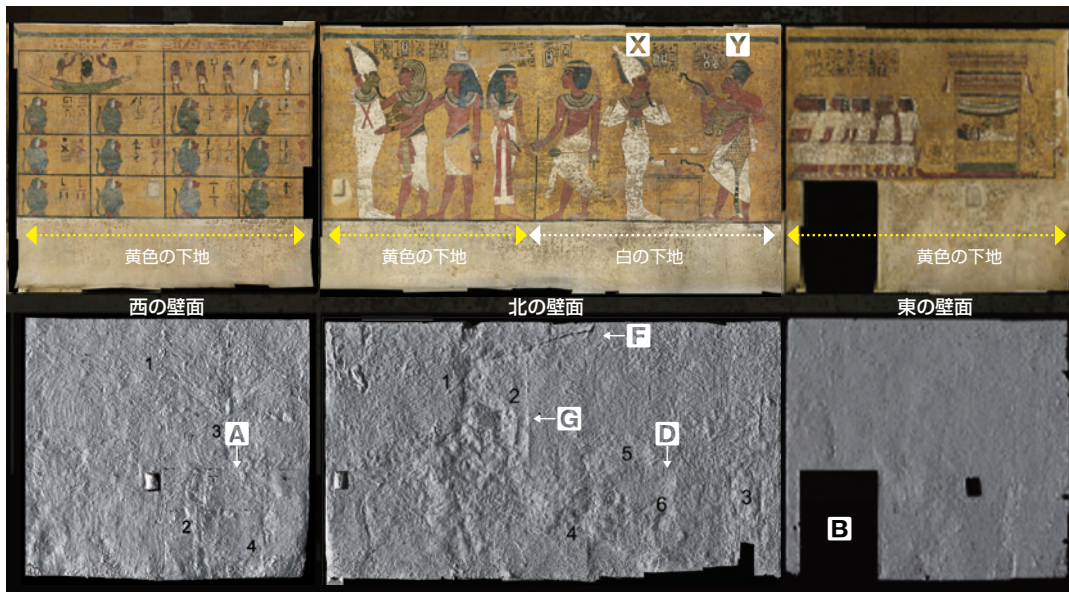
■21世紀最大の発見？ ニュースが世界を駆け巡る

財団が10月に助成した、イギリス人考古学者ニコラス・リーヴス氏の調査に世界が注目している。「古代エジプト三大美人」の一人でツタンカーメンの義母としても有名な、王妃ネフェルティティの墓が、リーヴス氏の仮説通り発見されそうな予感からだ。

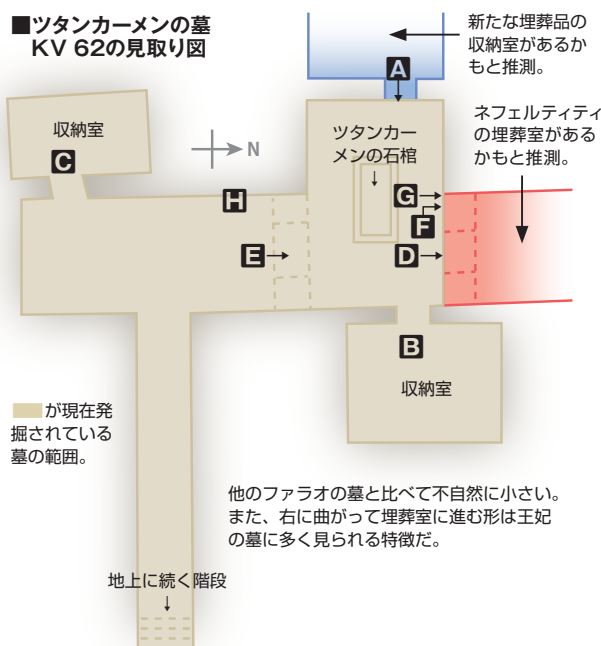
ネフェルティティの夫のアクエンアテン（アメンホテプ4世）は、BC1368年頃、太陽神アテンの神崇拜を掲げてアマルナ遷都を行ったファラオだ。この遷都には、神官たち多くの反対勢力が存在した。アクエンアテンと次のファラオであるスメンクカーレーの死後は、アクエンアテンの幼い息子・ツタンカーメンがファラオに即位するが、反対勢力に同調し元の首都や多神教に戻ることになる。

実はこのアマルナ時代の明確な記録はほとんど残っていない。アクエンアテン、スメンクカーレー、ツタンカーメン、アイの4代は、次のファラオとなった軍人出身のホルエムヘブにより王統図から抹殺され、歴史が書き換えられてしまったからだ。

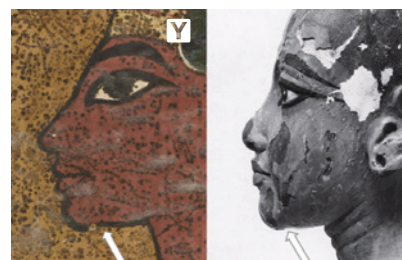
ネフェルティティは特に謎に満ちていて諸説あるが、リーヴス氏は、アクエンアテンからファラオを継いだスメンクカーレーこそが、ネフェルティティのもうひとつの名だという説をとる。ファラオの共同統治者であり、名を変え次のファラオについたほどの権力者ならば、立派な墓があるに違いない、にもかかわらず



■ツタンカーメンの墓 KV 62の見取り図



口元の特徴がネフェルティティの像と似ている。



顔が若く、顎がツタンカーメンの像と似ている。



昨年10月22日に財団を訪れたリーヴス氏と財団事業部長の佐藤。本誌の「日本の技」シリーズのインタビューでもある上野由美子氏が、リーヴス氏の片腕として調査に同行している。リーヴス氏は1956年生まれ。古代エジプトに魅了された多くの少年の一人で、友人たちが卒業していく中、自分だけは興味を持ち続けた。13歳の頃にはボランティアで博物館を手伝い、学芸員たちを驚かせていたという。

ず、どこにも見つからない。

■ツタンカーメンの墓の壁面スキャン画像に注目

ツタンカーメンの墓は、黄金のマスクのイメージから立派な墓と思われがちだが、実は他のファラオの墓と比べるとあまりにも小さいのだ。リーヴス氏の仮説はこうだ。

「19歳の若さで急死したツタンカーメンには墓の準備がなかった。そのため急遽、すであつた義母で先王のネフェルティティの墓の中に部屋を増築し、ツタンカーメンを埋葬したのではないか。その推理が正しいければ、墓のさらに奥には、本来の墓の主であるネフェルティティが眠っているはずだ」

この仮説のきっかけは、エジプト政府がツタンカーメンの墓のレプリカを作るために撮影した、壁面の高精度スキャン画像を、リーヴス氏がさらに分析したことからだった。

壁の凹凸を強調して精査すると、まず、西の壁に小さな入口の形跡が見えてきた(A)。この入口は、周囲の石とは違う質の土などで埋められている。入口のサイズも、すでに発見されている東側の収納室(B)や南西に離れた収納室(C)の入口と同サイズなのだ。この壁の向こうには、BやCと同様の埋葬品を納める別室があるに違いないと考える。

■北の壁にも奥の部屋がある予感

北の壁のスキャン画像にはさらに多くのものが確認できた。先のAよりも大きい通路のような空間を埋めた跡D。ここも周囲の岩とは質感が違い、もともと埋められていたツタンカーメンの石棺がある部屋の入口Eと近い構造と推測する。この先にも比較的大きな空間があるのではないか。

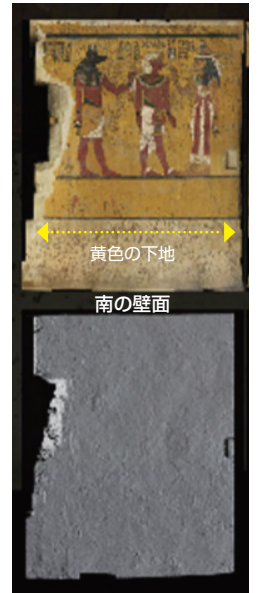
それを補完するのが天井近くのヒビ割れFと、天井から床に向かう垂直の痕跡Gだ。Fのようなヒビ割れは、現代建築でも、部屋と部屋の間、壁が重力によって引っ張られたり、縮んだりした際に、部屋の端にできやすい。Gは前室のHの壁の延長上に位置し、元々壁だったところを後から西方向に掘り進めたために残った跡と考えられる。つまりこの部屋は元々は通路だった可能性が高く、その先に然るべき埋葬空間があるのではないか。

ツタンカーメンの埋葬室が後から作られたと推測する証拠はまだある。4面の壁画のうち北面のGの位置から右半分だけが下地の色が白で、他の面は黄色地になっているのも、理由があつてのことと思われる。

■もう一人埋葬されていたら誰?

元々ネフェルティティの墓だと推測する根拠もいくつかある。地上から階段を降りて右に曲がって埋葬室に向かうのは王妃の墓の特徴であること。ファラオの墓は左に曲がるのが標準だ。

北面の壁画の右端はツタンカーメン(X)に「開口の儀式」を執り行う次のファラオのアイ(Y)だとさ



れている。しかしその横顔を想像と比較すると、別の見方ができる。Xの口元はネフェルティティの像の口元と特徴が似ている。Yの顔は高齢だったアイにしては若く描かれ過ぎ、顎の形はツタンカーメンの像の顎によく似ている。もしかしたらこの絵は、亡くなったネフェルティティに「開口の儀式」を執り行うツタンカーメンを描いているのではないか。

ツタンカーメンの黄金のマスクには、ネフェルティティの名前が記されていることが別の調査で判明している。ネフェルティティがスメンクラーエと同一人物なら、2つのマスクが作られた可能性がある。王妃としてとファラオとしてだ。ツタンカーメンを埋葬する際に、一方のマスクを転用したのではないか。

■小さな取っ掛かりを大切に

「何もないかもしれないし、あつてもネフェルティティの墓ではないかもしれませんが。しかし、もしかしたら世紀の大発見に至る可能性もあるのです。それは、スキャン画像という小さな取っ掛かりを穴があくほどじっくり見たからです。人生も同じです。自分にこんなチャンスが訪れるなんて想像していませんでした。小さな興味を大切にしないではいけません。ですから、財団が50歳以上の博士号取得を支援する事業には共感します。松田妙子理事長が71歳で東京大学の博士号を取られたのもグレートです! 何歳で始めても遅くはありません。私も余裕ができたのですが、次はぜひ日本の考古学を研究したいと思っています」

11月にエジプトに渡ったリーヴス氏らは、日本製レーザー機器などで壁の向こう側を調査。11月末に世界に発信されたニュースでは、壁の向うに部屋か石棺かもしれない空間があること、エジプト考古相が「確率は60%から90%に上がった」と発言したことが伝えられている。今後ぜひ注目。

企業への提案や講師をする際に説得力を増す力強い味方

栗原冬子さんはとにかく多才だ。大学卒業後に客室乗務員として入社した航空会社では、早々にチーフパーサーの資格を取り、主に国際線ファーストクラスを担当。結婚、子育てのために家庭に入ったかと思えば、以前から興味を抱いていたアロマテラピーを学んだ。自分のサロンを開くにとどまらず、講演、執筆、独自のブランド立ち上げなど、アロマの世界ではトップランナーの一人として活躍している。2012年には株式会社Bon22（ボン・ヴァンドウ）を設立。アロマ、健康、美容、マインドの4つをテーマにコンサルティングや商品開発、さらに4つを連動させた心と体のサポートやライフスタイルの提案をしている。

■アロマを深めるにはもっと健康を学ばなくては

アロマテラピーの講師や指導をしていく中で、精油成分や香りと人間の心身は切り離せないことを感じ、もっと健康のことを学ぼうとして出会ったのが健康管理能力検定だった。3級の生活リズムアドバイザー、2級の健康リズムカウンセラーを取得後に、1級の健康管理士一般指導員を受験できる。

この検定の基本はひとことと言うと「体のリズムを知ること」だが、健康管理のプロを目指す人のための資格である1級となると学ぶ範囲は広く、健康管理学、生活習慣病の基礎知識、心の健康管理、栄養学など、公式テキストだけで6冊にも及ぶ。簡単ではない気がするが、3級、2級を経て、意識の高い人が受けるので合格率は高いそうだ。

2008年に受検・合格した栗原さんは、それまで漠然としていた香りと体の関係をきちんと整理で

株式会社Bon22 代表取締役
ライフスタイルデザイナー

栗原冬子さん

著書に『アロマテラピー使い切り・組み合わせ事典』『手作り石けんと化粧品で ナチュラルスキンケアアキほんBOOK』（ともにマイナビ出版）。他にも、フードアナリスト、空手初段、フルマラソン完走などなど、好奇心と行動力あふれる栗原さん。



き、心身の症状に合わせた指導やブランドの提案ができるようになった。そのことで評価はさらに高まり、講演、セミナー、コンサルティング等の依頼が広がった。

■2つを結びつけて新しい価値を生み出す

テーマもアロマだけでなく、生活習慣病や食育、美容、キャリア教育、接客・ホスピタリティなどにも広がり、自治体の講座、企業研修、小中学校、保健所や税務署などと依頼元も幅広い。アロマと健康管理の2つから、新たな分野を確立しつつある。

昨年、独自ブランドのYogoromaという、ヨガとアロマを融合させたスタジオとセラピスト育成を始めた。ヨガの呼吸法で天然の芳香成分を体内に取り込むものだ。さらにこの2月、銀座にファスティング×Yogoromaのサロンもオープンするなど、健康への興味から多彩な展開につながっている。

「興味があることは全部やりたい子供で、2つの遊びを同時にやる。ながら族でした。ムダに休むのがもったいなくて、例えばスキーに行ってもカフェで休んだり絶対しません。だってリフトで上っているときに休めるじゃないですか。おかげで、時間を有効に使ったり、2つのものを結びつけて新たな価値を提案したりするのは得意なんです」

■アロマの新たな時代をリードする

近年、イベントや店舗などの空間の香りをコンサルする仕事が増えている。2015東京モーターショーのプレスルームを、ストレスなく仕事ができる香りで世界の記者を迎えた。スポーツクラブ、高級家具店、リゾートホテル、介護施設、演劇の舞台など、その空間にいる人の心理や体調を意識した香りのアレンジでオフアールに役立っている。

「健康管理士一般指導員になると、2か月ごとに健康の最新情報や学術情報が掲載された冊子が届きます。巻末には研修問題があり、レポートを提出して添削を受けなくてはいいんです。レポートは大変ですが、そうした情報フォローや常に学び続けるような刺激を与えてくれることで、活かせる資格になっているのだと感じます。私の肩書を見て、ぜひ取りたいという生徒さんもいるんですよ」